

ファイラー

岡本俊弥

ぼくは何ものか。

俳優なのか、声優なのか、大道芸人なのか。

それとも、佐竹ノリヒロなのか。

佐竹は政治家を演じている。記者会見に応じて質問に答えている。大半の質問は受け流すが、一つ隠されたスキャンダルに触れられたとき、一瞬の間合いを置く。表情に微妙な陰が差す。そのあと、絞り出したように声音が変わり、また先ほどのようにぶつきらばうな返答に戻る。タイミングと声の調子、表情の微細な違い。平凡な役者ではまず表現不可能な、それどころか、ふつうの人間ではありえない佐竹独特の変化

だった。じっくり見ない観客には、認識できないかも知れない。けれど、雰囲気は明瞭に伝わる。この政治家には、何か隠されたものがあったのだと、メッセージが伝わってくる。

佐竹ノリヒロは三十五歳の俳優だった。

さまざまな役柄を演じてきた。セリフの少ない端役だった頃から、役に要求される以上の存在感を見せていた。まさに存在感だ。そこに一人の人間がいる、と分かる。すぐに才能を開花させ、実年齢と関係ない幅広い役がこなせるようになる。外国生まれで、世界市場向けドラマの準主役を務めたこともある。世界的スターになる途上にあった。

五年前、佐竹ノリヒロは亡くなる。

死因はオーバードーズによる、事故とも、自殺ともいわれる。不確かな憶測がたくさん流れた。ただ、亡くなったことにはメリットもある。スキャンダルは同情に変わり、放映自粛などのボイコット騒ぎには結びつかなかった。

メディアでどんな騒ぎがあったのかなど、ぼくにとってはどうでもよい。生きている佐竹がもういない、ということが重要なのだ。

キャラクタ、佐竹ノリヒロは今でも存在する。

昔だったら、それは単なる過去の動画、静止画のデータに過ぎなかつたし、よほどの大物でもない限り、すぐ忘れられただろう。

死者をデジタルで甦らせる試みは、これまで何度も繰り返されてきた。

一見本物と変わりなく見える。

だが、それは特定の一場面に過ぎない。長尺のシーンになると、既存のフェイクではにせものだと気づかれる。顔立ちはそっくりで動きが人間らしくても、本人とは明らかに違うと分かるのだ。

特有の間合い、特有のしぐさが、どこか不自然になる。

最近までは、機械学習さえ進歩すれば、そんなギャップなど埋められると信じられてきた。今の機械学習は一を聞いて十を知るが可能だ。小さなコアデータがあれば、幼児が言葉を学ぶように飛躍的に学習が進む。

しかし、俳優が演じる抽象化された人物は、学習では十分な複製ができない。過去と全く同じシーンでもない限り、大量の例外処理が発生し、カスタマイズが煩雑になる。死者の知名度を生かせるといっても、役柄ごとに大修正が生じるようではコストが合わない。

だから、ぼくの仕事が成立する。

フィクションに描かれるものは、ある意味すべてがデフォルメである。物語の中に没入できる人間だけが、物語の人物をリアルに感じる。そういう恣意的に歪められた人間は、機械との相性が悪いのだ。

フィクションの人間は、人が見れば人間だが、機械が見ると人間ではない。

学習しようにも、内容は大きくばらついている。そういう人間を真似られるのは、やっぱり人間だけなのである。

個人的なことを話すと、ぼくは佐竹ノリヒロとどこも似ていない。

顔立ちも声も、背格好から学歴、年齢までまるで違う。映画やネットで出てくる佐竹とぼくを取り違えるファンなど、おそらく誰もいないだろう。

ただ、事務所がオーディションで選んだ候補者の中で、もつとも有望なのがぼくだった。合格基準は純粋な主観テストである。事務所の関係者が、機械合成の佐竹の映像に、候補者が動きと声をつけたものから判定する。シチュエーションはあらかじめ通知されている。

佐竹は中年の夫を演じている。妻とダイニングで食事をする場面だ。他愛ない世間話の合間に、ゆっくり夕食を食べ酒を飲む。お互い相手の話は聞いていない。佐竹は毎日酒を口にするが、大酒というほどではない。いくら酔いが回っている。そのとき、妻がある重要なキーワードを告げる。佐竹はわずかに表情を変える。次の瞬間、妻を殴ろうとするが、体を泳がせただけで倒れ込む。

シーンの間合いは自由に取れる。候補者が演技をすると、映像はそれに合わせて動く。表情も声の調子も、演者をトレースする。画面の上で、それは佐竹になる。佐竹らしさを競うのだ。数十人の応募者中、ぼくは最高の評価を受けた。

過去の映画やドラマが好きで、アーカイブを浴びるほど見たことはある。けれど、もともと俳優を志していたわけではない。

演技の経験もほとんどないし、発声練習の方法すら知らない素人だ。面白そうな公募だとは思ったが、合格するとは思ってもいなかった。

オリジナルの俳優はまだ存在する。ただ、昔のように俳優がすべてを担う必要はない。背格好など外見までなら、機械が補正してくれる。スタント的なアクションは、むしろ機械でないとできない。

その一方、日常的なシーンにヒトの存在は欠かせない。どこかで違和感を生む谷間が姿を見せるからだ。人と機械生成との谷間が生じたときに、穴を埋める演技者は新たな職業といえる。佐竹のように、オリジナルがもういない場合は必須だ。

ぼくらはファイラー、穴埋め屋と呼ばれる。

日本語ではピンとこないだろうが、ジャンパーやクツション、マットで、綿とか羽毛とかの詰め物を調整する職人を意味する言葉だ。機械演技に厚みを与えろという、人ならではの職業の割に、軽いジャーゴンドと思う。地位も不安定で、俳優でも技術

者でもない中途半端な存在だった。

ぼくは機械、つまりAIの技術者だった。

政府が機械技術の後れを憂慮し、大学に大量の関連学科を創設した時代、アイビィ世代の一人である。アイビィとはAIバブルのことだが、濫造されたばかりに十分な就職口はなかった。

まあ、予想できたことではある。

政府はこれまでも、法科大学院から行き場のない急造弁護士を生み出し、理系の博士課程を増設し博士を大学に溢れさせ、特許出願の専門家である弁理士を大量養成して路頭に迷わせてきた。たくさんの前科があるのだ。

将来日本は訴訟社会になる、企業で基礎研究が進み博士の需要が増す、そうなれば特許出願が激増する、と浅はかな予想をした。日本経済は停滞し、何一つ実現しなかった。あげく、結果の責任を取らず、民間に人材を丸投げした。日本政府の計画通り、民間や業界が踊る時代ではもはやないのに。

偉そうにはいええない。

当時学生だったぼくにも、先見の明などなかった。入試の倍率は高く、それなのに就職は大変だった。機械のエンジニアは、既に有り余っていたのだ。先端企業に行けるのは、海外の進んだ大学の卒業生だけだ。日々変貌する専門知識がないぼくらに勝ち目はない。いろいろと苦労したあげく、芸能事務所の契約社員に就職した。

著作物付帯権利保護法の施行は。新たな商売を生んだ。

かつて、ぼくの知らない昔は、公開されているデータは何でも使い放題だった。旧著作権法、個人の肖像権が禁止するのは、丸ごとのコピーや再配布だけである。機械学習に使うのは自由だった。

映画やドラマ、ニュース、さまざまなネットの写真、SNS上のファンが撮影した静止画、動画、秘匿されていなければ何でも学習に使えた。学習は「視聴」さえすればできたからだ。

旧法の対象範囲は、機械の進歩に比べて、明らかに時代遅れで狭かった。

機械学習のなかった時代では、画像には視聴以上の機能がない。それだけであれば、

対価＝視聴料が支払われるか、あるいは金銭価値がないと判断されるかだけの問題だった。

しかし、機械学習はデータを視聴するだけで、さまざまなもの盗む。言い換えると、データから勝手に付加価値を生み出し、データの所有者には還元しない。

たとえば、歌手の声、歌うときのしぐさ、踊りの手や足の動き、間合い、俳優のセリフの強弱、表情の変化、体の動き。

これは誰の権利なのか。

人が演じるパロディ、パステイシユならば、批評的とでも称して黙認される。似ているといっても雰囲気だけだからだ。けれど、完璧にコピーできたらどうなのか。顔立ちが違う別人が、全く同じしぐさで動いたとき、それが人間なら芸の技ともいえるだろうか、機械ならどうなのか。

そういった付加価値に関する権利が、著作物付帯権利保護法により明文化された。小説や一般書籍、論文やデータベース、そして映画、演劇、ドラマ、パフォーマンスなど、人間が表出するあらゆる創作物に対し、包括的に機械学習を制限できる権利が

できた。機械に学習させるには、許諾が必要になったのだ。

だが、侵害をどうやって立証するのかという問題はある。密かに学習され、表立って使われない、一目で分からない場合、権利はどうやって保護されるのか。

そのために、機械学習検知機械が作られた。

もともと機械によるフェイク、にせものを見つけ出すための装置だ。GANなどで使われる機械学習方法では、成果を測るのにいちいち人手を介さない。機械を二台置いて、相互に競争させる。片方がにせものを生成し、片方が真偽を判定する。その真意判定する側、にせもの検知能力を応用すれば、何が学習の原型だったのかを高精度で推計できる。

権利保護法違反による犯罪は非親告罪だ。

つまり、被害者が訴えるのではなく、公安警察が独自に内偵調査する。さらに、摘発訴追までを担う。

当局には最新の機械が設置され、発表媒体を常に監視している。検閲ではないのかという批判はある。機械の管轄権が、政府の安全保障会議の下にあるからだ。

「装置導入までの期間及び年間の維持費用を鑑み、かつセキュリティの向上を考慮するのならば、国家の安全保障業務と一体的に運用することが、最も包括的かつ合理的と思量する」

政府関係者はそう断言した。裏の意図が透けて見えるような官僚発言だ。

だが、世間の大半、特に権利を保持する著作権団体やメディア会社は、権利擁護を目的とした監視を必要悪と認めている。不法学習による機械創作は、彼らの収入源に大きな損害を与える。機械に人間の創造的な芸術活動を奪われてはならない。人間が生きていけることが、まず重要なのだ。

ぼくが所属するのは、死者を専門とする芸能事務所である。

著作権法に倣って、死後七〇年間この権利は有効になる。古い著作権法の時代なら、生きていたときの創作物だけが七〇年保護される。三十五歳で死んだノリヒロの場合、生前死後合わせて一世紀以上にわたり、この権利は創作物を保護する。

いまは、そこに許諾を得た機械生成の創作物も含まれる。権利者にとっては、ほぼ

恒久的な権利とみなせる法令だろう。

とはいえ、死後の創作はコストをかけずに産み出さなければならぬ。機械知識は不可欠であり、そういう意味で、テクノロジー企業ではない既存の芸能事務所では手に負えない。彼らは生者と契約するだけだ。死者の権利は、うちのようなニューカマー、新規参入者が運用することになる。

もともとぼくは機械のエンジニアとして契約した。機械学習ツールのオペレーションなら、地方大学卒のぼくでも問題なくこなせる。テック企業が開発したモーフイングツールを、カスタマーとして使うだけなので先端スキルは必要ない。代わりのできる人材なら、いくらでも転がっているだろう。いつ切られてもおかしくない、不安定な立場だった。

では、演技者となったぼくの評価が上がったのかというと、これまた微妙だった。佐竹ノリヒコに商品価値はあったが、佐竹は一流俳優とまでは行かないからだ。お金を生み出す有用な製品ではあるものの、社業を左右するほど重くはない、そんな位置付けだった。

ぼくはさまざまな作品の一シーンを、ばらばらに演じている。カット割りを多用する映画と同じなのかも知れないが、作品を作っているという実感がなかった。シーンの多くを自動生成に頼っているせいもある。不自然さが生じる場面だけ、ぼくが出演して谷を埋めるのだ。

事務所には、多彩な死者たちがいる。

多くは若年で亡くなったタレントたちだ。自死や事故死、急な病による死者もいる。人気上昇中に死んだものは利用価値が高い。しかも、契約料はベテランほどかからない。生前分のストックが少ない分、ベースコストが安いのだ。

死者になると、死後のコンテンツ生成権は権利者と再交渉するのだが、新法では人権のない死者よりも、テクノロジークostを負担する事務所側が有利に契約できる。

十九歳だった歌手がいる。

G A L Aのボーカルとしてセンターに立っていた。自作の曲がヒットした矢先に難病を患い、一年もしないうちに死んだ。

事務所は新曲をG A L Aに歌わせることにした。バンドの他のメンバーは生きてい

るのだが、旧メンバーは使わず新規に機械合成した。新曲も合成だが、ヒット曲とどこか似たフレーズを含んでいた。元のオリジナリティを適度にちりばめる合成なら、機械は人間に負けない。

ボーカルの倉持アキユアだけが、事務所のモーフィング技術でコピーされた。

アキユアは舞台に出演するだけではなく、定型的なインタビューにも応えることができた。だが、今回事務所はアキユアをドラマに出そうとした。

「いまいちだったね」

「ファイラーは付いてたんですよね」

「そりゃもちろん。今までは問題なかったんだが、ドラマではね」

「まあ、そんなこともあるでしょう。人間だって向き不向きはある」

「おいおい、他人ごとすぎるじゃないか。うまい話なのに」

「うまいって何が」

ぼくは、親しいプロデューサーと話をしていた。初めてドラマで「出演」した際に、いろいろとアドバイスをもたらった仲だ。

ファイラーは完全な黒子だ。ドラマには佐竹ノリヒロの名前は（事務所名と共に）出るのに、ぼくの名前は出ない。事務所の裏方扱いにすぎないからだ。プロデューサーはその扱いに同情してくれた。

「佐竹が生きているように見えるのは、あんたの功績じゃないか。どこかにリコメントがないとな、やる気も失せるだろうさ」

事務所に煙たがられないかと、ぼくは冷や冷やした。ぼくはしよせん俳優ではない。契約は続いてほしいが、名を売りたいわけではないのだ。

ただ、ぼくを指名して仕事の話をつけてくれるのはありがたい。

「アキユアをやってみないか」

「ええ、でも」

意外な話だった。ファイラーは、確かに合成する元の人物と似ている必要はない。老人が若者を演じたり、その逆もある。しかし、ジェンダーを変えるのはどうか。民族性や、人種などセンシティブな領域になる。

「気にすんなよ。どうせ名前が出ないんだから、誰がやったのかなんて分からないだ

ろ」

「うーん、事務所はだいじょうぶですかね」

「おれが話をつけてやるさ」

倉持アキユアがどんなキャラだったのか、ぼくは詳しく知らない。歌のいくつかと、生前のプライベート写真は見た。それから、現在の合成動画をいくつかも。

ぼくは理系ではあるが、論理的に考えるタイプではない。どちらかといえば直感的だ。佐竹を演じたときも、人物研究などはしなかった。佐竹はある意味天才なので、ぼくが調べたくらいでは何も分からない。それなら考えない方がまじだろう。

同じ雰囲気のアキユアから感じた。

アキユアの詞は、どちらかといえば古風で捉えどころがない。ふだん聞かない古語を多用する。だが、それが歌になると印象が一転する。裏側に隠れていた情感が顕わになるのだ。振り付けは今風で激しい。

しかし、素顔のインタビューでは、極端に寡黙になる。気持ちの浮沈を意図的にコントロールできるのだ。

ドラマではどうか。おそらく脚本以上にメリハリをつけてくるだろう。強弱を際立たせるのだ。

「いいね、本番もこれで頼む」

テストでワンシーンを演じ終わると、プロデューサーは採用を決めてくれた。

誰かは知らないが、別のファイラーが首になり、ぼくが後釜になったのだ。

事務所の中では、タレントそれぞれのファイラーが誰かは明らかにされない。ぼくはたまたま事務所のエンジニアからの転身だったが、たいていは個別に契約を結んだフリーランスだ。ちよつと気にはなったものの、見知らぬ他人に同情していても仕方がないだろう。

一人で複数のタレントを掛け持ちすること自体は珍しくない。事務所は人に掛ける費用に余裕がないと、折に触れて公言する。いったい誰が儲けているのか不思議だ。

すぐに仕事が始まった。

「佐竹も出るんですか。同じシーンで二役は初めてだな」

「珍しくないだろ、ふつうだよ」

群像劇で、佐竹とアキユアが絡むシーンがある。とはいえ、ファイラー同士で演技することはない。あくまで、機械の演技をファイラーが補正するやり方だ。つまり二人が会話する場合でも、佐竹の視点とアキユアの視点は、別々に収録されるのだ。

佐竹は公安の刑事を演じている。潜行しているスパイを追っているのだが、小物ばかりで本命が見つからない。尋問シーンがぼくの出番だった。

場面は駐車場のようなどころだ。広い空間ではなく、数台車が入れば一杯になりそうな穴蔵だ。空っぽで、一台も止まっていない。出口にはシャッターが下りている。高いところに吊された最小限の照明が灯るだけだった。

コンクリート床面の中央で、傷だらけの男が椅子に座っている。拘束具はなく、ただぐったりとしている。佐竹が男の周りをゆっくりと歩く。ときどき小さくつぶやきを入れる。顔の表情と、つぶやきの変化は同時ではない。タイミングが微妙にずれていく。男は声を出さない。

アキユアが登場する。

闇の中から足を引きずりながら。素足で靴は履いていない。目立つ傷はないので、足は最近負傷したものではないだろう。アキュアは佐竹の敵対者となる。しかし、この時点では役割は不明で、謎の存在である。

暗い照明が顔に当たる。脱色された髪をツインテールに束ね、隈取りめいたシャドウを入れている。表情がよく分からない。右手に細長いものを持っている。さび付いた金属棒だった。アキュアはいきなり金属棒を振りかぶる。佐竹が何か叫ぶ、アキュアが答える。安易なドラマなら怒鳴り合いになってもおかしくないシーンだが、アキュアの返事は異様に冷静だ。

ぼくはまず佐竹となつてアキュアと対峙する。シーンではすべてのセリフは決まっている。セリフの中身は多少間違えても問題ない。この段階では、アキュアは自動生成された動作になる。違和感があつても、ぼくは無視して進める。重要なのは間合いと表情だ。体の向きや手足の位置が重要なときもある。今回は、そこまではないだろう。

次に、演じる相手が入れ替わる。アキユアは闇の中に潜んでいる。無表情だが、目は大きく見開かれ佐竹の動きを追っている。気配は完全に殺されていて、手狭な駐車場の中でベテラン刑事に気付かれない。間合いを取りながら接近する。その動きを映像は捉えている。金属棒を振りかぶり、セリフを発するまでは、画面上唐突だが、アキユアにとっては一貫した動作だ。こちらは、その間合いを慎重に表現する。

どちらの場面でも、相手側の動きに多くの演技が反映されたものは使われない。それぞれについて、独立した収録を行う。演技を合成する段階で、機械が微調整を入れることになるだろう。

こんなことで、辻褄が合うのか。

ぼくはいつも疑問を感じるのだが、関係者は問題ないと考えているようだった。機械合成と人間の演技の組み合わせは、今のところ順調なのだ。

事務所では、所属タレントが演技する場面までを制作する。それ以外のシーンは外部のプロダクションが作る。昔のように大勢のスタッフは雇わない。大半を機械が合成する。

新法によつて、俳優の権利、といふか事務所の権益は守られても、裏方の雇用までは守られなかったわけだ。

撮影監督すらおらず、最終的な判断はプロデューサーが一人で行う。それも、使うか使わないかの、二者択一だ。ダメでも、その場で何度も修正ができるので問題は無い。

いつものように、ぼくは分割されたシーンを機械的にこなして仕事を終えた。オペレーションまで演技者がするのだから、究極の省人化だろう。

数週間が経ちドラマは無事に配信された。

ぼくは例によつて見ていない。関係者向けの試写くらいはあつてもよさそうなものだ。プロモーションも含め、すべて配信で行われる。もちろん、配信は無料では視聴できない。だからといって、仕事のたびに自腹を切る気にはなれないだろう。安い歩合給の契約社員ならなおさらだ。

スーツを着た審問官が、一人で座っている。

地下の尋問室のような部屋を想像していたのだが、そこは単なる会議室だった。照明が皎々と明るい。なんの飾りもない無機質な空間だった。

「ご協力いただきありがとうございます」

感情のこもらない声で、審問官は語りかけてきた。小さな声だった。

「早速ですが、著付権法違反の容疑について、通告しておきます」

わけが分からない。不慣れなネクタイを締めてきたぼくは、気持ちが動揺するのが分かった。

変な成り行きになったのは、つい昨日のことだった。

「評判はどうでした」

「ああ、好評だった」

配信の翌週、昼食に出たぼくは、偶然プロデューサーと出くわしたのだ。手を上げて挨拶を交わすと、お世辞めいたことを言ってくれた。

「あなたの演技には独特の味があるね」

「いえ、こちらこそお世話になり……」

バイブレーション音が聞こえ、プロデューサーの端末にメッセージが届いた。

「まずいな」

一目見て、プロデューサーは顔をしかめた。

「何かあったんですか」

「呼び出しを食らった」

「え、どこから」

「公安だ。ドラマの内容に問題があるらしい。たいしたことじゃないと思うけど」

いやな予感がした。

「悪いけど、おたくも来てよ」

「いやいや、ぼくは単なる裏方ですよ、オーナーでもないのに」

「名指しだ。ほら」

公安は向こうから調査には来ない。疑義が生じた場合、被疑者を呼びつける。一般的に犯罪と違って、配信関係者が逃げ出すことはないと思っっているようだった。

何れにしても疑義を表出するのは、公安にある機械であって人間ではない。だから

余計に気味が悪い。

キャプションにも出てこないぼくが呼び出されるとは理不尽だが、少なくとも機械は裏方の関係者を把握しているようだった。

出頭するのは、事務所の社長、プロデューサー、それからぼくだった。公安から呼び立てを食らって、事務所の担当者で済ませるわけにはいかないのだろう。社長とはあまり話したことがない。事務所の建物に出入りする機会が少ないからだ。仕事の大半はリモートでできる。

審査官は、まず疑義の生じたドラマ名を挙げ、あとは罪状を坦々と読み上げた。

「右ドラマにおいて、権利判定装置は、被疑事務所が権利を有しない著作物から許諾を得ない学習を行い、該著作物の権利を侵害したものと判定する。一、演技アバター佐竹ノリヒロにおける言動お呼び表情、所作間合い及びその時間的な順序。二、演技アバター倉持アキュアにおける言動お呼び表情、所作間合い及びその時間的な順序。これらは同法第四条第一項から五項に違反するものと判定する。詳細はデータにて開示されるものとする」

ぼくは黙っていた。何も言うなと指示されていたからだ。しかし、複数の死者が出る演ずるドラマの、ぼくが担当した部分だけを抜き出されたのには驚いた。許諾を得ない学習とは、いったい何のことだ。

「被告人には異議申し立ての権利があります。期日までに応諾するか、裁判を受けるかを選択してください、以上」

それだけ聞かされて、三人は退出を促された。その場での異議申し立てはできないのだ。

「まずいな。配信は中止になる」

建物を出たところで社長が言った。

「やむを得ませんね」

プロデューサーは諦めたように続けた。

「あれって、どういう意味でしょう。不法な学習があったみたいに関こえましたが」
応諾するのか。ぼくは成り行きに不安を感じる。

「きみの演技は、過去の何らかの既存映像から自動合成したものと判定されたんだ。

覆すのは難しい」

社長は不機嫌そうに言った。

「きみに責任があるのかどうかは分からないが、関わった以上は逃れようがない」

「しかし、あの言い分はないでしょう。未保有データで勝手に学習するなんて、会社のシステム上無理だ。演技のログだって残っています」

「ログは捏造が容易だから証拠にならない。第一、機械相手の裁判なんてするだけ無駄だ、まず負ける」

「こういうケースはたまにある」

プロデューサーも渋い顔をする。

「ときどき公安の機械は判定のスレッシユをさげて、訴追件数を上げようとする。監視は怠りないという、下々に対する見せしめなんだ。運が悪かったと思って諦める」
諦めるか、ぼくはがっかりした。

公安機械の判定をめぐる裁判は覆らない。反証の提示が難しく、立論が困難だからだ。相手が証拠とするデータは、生のままでは人間に理解できない。そもそも民事で

はないので、検察も分かりやすくする気がない。顧問弁護士事務所は、公安機械に対抗できるほどのスキルを持っていなかった。

結局、会社は罪状を認め、禁固刑を免れる代りに高額の罰金刑を受け入れた。

ドラマは配信停止だった。もう陽の目を見ないだろう。

ぼくは首を免れたものの、出番自体がなくなつた。いつ同じことが起こるかもしれない。プロデューサーも、あえてリスクは取るまい。

固定給がない契約社員は、たちまち干上がる。

だが、ぼくはどんな既存映像が違反になつたのか気になつた。

ドラマの全編を社内で見覧させてもらうことにした。前科者のぼくが歓迎されるわけがないが、社長も不可抗力と思つたのか黙認してくれた。

ドラマの出演者はすべてが死者だった。

事務所では、他社の仕事にタレントを送ったり、あるいは自社で生者と契約してドラマを制作したりする。死者が主役を張る機会は少ないものの、ゼロではない。だが、死者だけの企画はあまり聞かない。

いまでも、機械が合成した俳優、死者の蘇りを嫌う視聴者が一定数存在する。事務所が大々的なプロモーションをかけなかった理由は、おそらくそんなところにあるのだろう。

主役は、九十歳で亡くなったベテラン多岐川茜である。この事務所には本人の希望で入ったという。

ドラマでは、ある女の十代から六十代までの半世紀にわたる生涯が描かれている。死者のタレントの場合、過去を、つまり生前を新たに合成することはあまりしない。コンテンツは既にある。コストを考えても、微小な機械修正程度で済ませるのがふうだ。

ただ、多岐川は脇役の域を出なかった。整った顔立ちで一般人の間なら目立つたろうが、同レベルの俳優はいくらでもいた。長い現役だった割に出番が少なく、名脇役とまでも言えず、知名度は低いと思う。主役をやらせようとするなら、新たな演技が必要だった。

考えてみれば、うちの事務所に大物なんていない。

係累のなかった多岐川が、未練を残して事務所入りを願ったことでも分かる。自分の権利を無償で譲渡したのだ。悔恨が籠もっているのでは、と考えてしまう。とはいえ、多岐川のレガシーだけで不十分なのは確かだ。死者だけで作るドラマには、機械合成による厚塗りが必要だろう。

最初の画面は瓦礫の残る焼け跡から始まる。

多岐川茜は十代後半の娘だが、頭を頭巾のような布で覆い、くすんだ色の洋服を着て歩いている。表情を殺した顔は、伏せ気味に地面を向いている。

騒がしい音がする。トラックが数台砂埃を巻き上げながら、スピードを上げて通り過ぎる。連合国軍の兵士たちの、表情のない顔が見えた。街での組織的抵抗はとうに終わっていたが、厳戒体制は続いていた。

多岐川の扮する娘は、先日の出来事を思い出す。どこからか現われたゲリラ兵による銃撃戦が発生し、知人が流れ弾をくらったのだ。即死だった。安心して外出することとはできなかった。

娘には恋人がいる。街の外れにアメリカの兵舎があり、そこに通訳として勤務している。すでにこの国には政府はない。降伏がないまま無政府状態が拡がり、唯一秩序が保たれているのは占領地にあるキャンプだけなのだ。

やがて、娘に子どもが生まれる。女の子だった。

この頃には国内の混乱は収まりつつあったが、根絶はされない。暫定政府が作られるが、最初に始まったのは再徴兵だった。多岐川茜の夫も召集される。

また戦争なのか。

ラジオニュースは、福島から新潟の旧県境に敷かれた軍事境界線での、北側の不穏な動きを伝えた。連合国内で対立が起こり、ソビエトが支援する人民共和国の軍が南下する兆候が見られたのだ。南側に残る旧軍の兵士はすべて徴兵され、国軍として再編された。

数ヶ月後、境界線を越えた北側共和国軍と国軍が接触する。激しい戦闘が起こる。北も南も、もともと同じ国民同士による殺し合いになる。エスカレーションを恐れ、連合国が直接戦うことはしない。民間を巻き込んだ地上戦で、何十万人もの戦死者が

出るものの、戦線は一進一退のまま膠着状態となる。茜の夫は戦死する。また、戦争で捕虜となった北側兵士の一人に、少年兵だった佐竹がいた。

十年後の舞台は、北東京の一画だ。核により焼け野原となった旧東京は再建されず、茨城に北東京市が作られる。規模は昔の東京の十分の一だったが、新しい日本の首都には違いなかった。旧首都人口の多数を占めた東北人が北に強制退去させられたことも、街の雰囲気を変えた。

佐竹は釈放されたが北には帰らなかった。北のスパイを狩る公安警官となって取り締まりを始めている。摘発は容赦がない。自分が北の出身者だと意識するから、余計に厳しさを増すのだ。この時点で、佐竹と茜との接点はない。

茜と娘は、貧困にあえぎながらも生き抜く。茜は商売を始めており、時勢に合っていたのか次第に客を集めるようになる。茜は娘を顧みなくなっていく。

成長したこの娘がアキュアだ。

ドラマはこの国の裏の戦後史を描いたものだった。共和国は前世紀末に消滅し、そ

の記憶を持つ国民はほとんどいなくなった。物語も純粋なフィクションと捉えられるだろう。

群像劇で、さまざまな人物が入れ替わり登場する。先に書いたとおり、死者の俳優たちだ。

多岐川茜を演じているファイラーは、どうやら一人ではない。ドラマの設定は一〇年単位で動く。そのたびに容貌も変わるし、社会の変化に応じて演じる内容も変わる。たしかに、分けるべきなのかも知れないが、ちよつと気になった。

茜の役にはモデルがある。

多岐川茜よりずいぶん前に故人となった、戦後カジノ界隈の大立者だ。カジノそのものは合法だったが、香港や台湾を仕切る海外の黒社会とも結びついていた。放任されたアキユアは、黒社会に溶け込んでいく。

しかし、その社会の中には北が巧妙に紛れ込ませたスパイ網が隠されている。アキユアは北の情報網に取込まれたのだ。

ぼくが演じた部分は、シームレスに場面へと反映されていた。お金に困ることはな

いが温もりのない家庭、ヤクザの手下を顎で使うシーン、凄惨なりんちを無表情で見つめるその間合い。自分で見ている限り、アキユアは生き生きとその画面の中で動いていた。まるでフィルム時代の活劇のように生きていた。

佐竹が絡んでくる。スパイ網は存在を知られており、全容を探るのが佐竹の任務だ。酷薄さでは公安も負けてはいない。逮捕者を極限まで締め上げる。国家安全法は幅広い裁量権を警察に認めている。安全のためなら人権は大幅に制限される。拷問ですら合法だ。権力を愉しむかのような表情には、ぞくりとする迫力がある。佐竹もまた生きた人間として描かれていた。

予想したことではあったが、ぼくがやった仕事の出来としては上々で、だからこそ摘発された理由の想像ができなかった。

「よう」

試聴室を出たところにプロデューサーがいた。偶然ではなく、ぼくを待っていたようだった。

「お久しぶりですね」

「話しておこうと思ってるね」

「何か仕事ですか」

「いま見てたらしいけど、ドラマの摘発の件だ」

ぼくとプロデューサーはビルのラウンジに移動した。関係者のいないところだった。

「気がついたかも知れないが、あのドラマは通常と同じ作り方にはなっていない」

「死者だけでしたね」

「結果的にそうなったのには理由がある」

「結果的って」

「自分が演じたシーンを見てどう思った」

「特に問題はないと」

「あんたが演じたものと違う、とは思わなかったか。自分でオペもしたんだろう」

「機械的な微修正は入っていましたが、どういう意味ですか」

「あんたのシーンは、完全に差し替えられたものだ。フル機械合成だよ」

「それは、ありえない」

即答はしたが、心の底が冷えた。

「新しい技術で作られている。この方法ではいったん機械が合成したものを、演技者が補正する際に、もう一度機械学習が行われる」

ぼくを学習したというのか。

「なぜ、そんなことをするんですか」

「他の死者はどうだった。不自然だったか」

「いや……」

「この事務所ではファイラーの削減を進めている。死者にファイラーを割り当てて、ファイラーの学習が進んだ段階で契約を止める。タレントの大半はもうそうになっている。機械は生前のタレントではなく、芝居の場面に合わせた最適なタレントを動かすようになる」

「機械学習を無断で行うのは、法に違反するじゃないですか」

「ちゃんと契約書を読んだか。契約社員は、機械学習権を事務所に無償譲渡すること

になってる。ファイラーの条件は最初からはつきりしてる。個別契約が要るタレントとは違うんだ」

ぼくは啞然とする。契約の細目など気にしたことはなかった。

「だとしても、なぜぼくの演技部分だけが公安に摘発されたのですか。機械が何かやったのですか」

「おれはあなたの能力を勘違いしていた。死んだタレントの動きを研究して、オリジナルの表現をさせていると思っていた。どうも、そうじゃなかったみたいだな」

プロデューサーは疲れた表情をみせた。

「あなたがやったのは、誰かのものまねだ。それもマイナーで忘れられた、デジタル化以前のフィルムに埋もれているやつだ。その部分部分を組み合わせているが、中身はそっくりコピーしている。公安の機械を甘く見てはいけない。機械は人間の関与した演技と、純粹な機械学習を区別できる。あなたがやっている間は人のものまねとみなされたが、機械学習に切り替わった段階で違法と判定されたんだよ。まあ、確かにそれはあなたの落ち度ではない。見抜けなかったおれらのミスだ」

「こじつけだ。少なくとも意図的にしたんじゃない」

「分かってるさ。無意識の奥に染みついた記憶は、無意識に出てしまう。でも、そうである以上、あなたの学習結果も使えない。残念ながら、事務所としてメリットがなくなっただけだ」

プロデューサーは力なく言った。それが最後通告だった。